

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第11巻 第3号



ジライ谷野猿公園

白山自然保護センター中宮展示館の裏山にある自然観察園路を約20分ほど歩くと、ジライ谷野猿公園があります。野猿公園には管理休憩舎があり、地元吉野谷村の管理人により来園者への説明やサルへの餌付けなどが行なわれています。この休憩舎は中宮展示館建設に先だつ昭和47年6月に竣工し、多くの来園者に利用されてきました。構造は木造平屋建てで比較的簡素ですが、冬季の積雪を考慮して柱や梁は丈夫な造りになっています。しかし、昨冬のように雪が少なくても、一度は屋根の雪おろしをしています。

昭和48年7月に現在の中宮展示館が吉野谷村中宮にオープンして以来、毎年1~1.5万人が野猿公園を訪れており、展示館の入館者の2~3人に1人はサルを見るために同公園に足を運んでいることとなります。野猿公園の管理休憩舎と展示館は有線電話で結ばれ、餌場にサルが出ているかどうかは入館者に即座にわかるようになっています。(岩田)

山の不作とニホンザル

水野昭憲

秋が深まって、日に日に紅葉前線が白山から降りてくる頃、多くの人が白山ろくへやってくる。その人達の中に、中宮温泉近くで餌付けされているニホンザルを見るのを楽しみにしてくる人も多い。例年だと秋には、サルが野生の木の実を求めて遊動し、なかなか餌場へ姿を見せず、来園者をがっかりさせるのだが、今年はほとんど毎日、餌場へサルが出てきて皆さんを楽しませた。

〈ニホンザル、カムリA・C群〉

中宮温泉近くのジライ谷野猿公園は、白山スーパー林道料金所の蛇谷をはさんだところであり、白山自然保護センター自然観察園の一部にもなっている。ここへ出てくるサルは、カムリA・C群と名づけられており、昭和41年から餌付けされている群れである。大雪だった昭和56年の冬に分裂し、大きい方のA

群はこの夏に105頭、小さい方のC群は35頭であった。A群の方が優勢で、これが餌場を占領している時には、C群は近くの山にいて餌場をうかがっていてもそこへ出てくるわけにはいかない。給餌にあたっては、加工したものを与えたり、来園者が餌を与えたりすると、サルがいろいろな人に食べものをねだってトラブルを起す原因となるので、トウモロコシ、大豆、小麦を管理人だけが与えている。利用者のマナーがよいこともあって、全国に20数か所ある野猿公園の中でも、野性味のあるサルをゆっくり観察できる野猿公園として評価されている。

この餌場でサルが見られないことがあるのは、人間の与える餌よりも、もっと魅力ある野生の食べものが山に多い時である。梅雨期には山の全ての植物が軟らかい若芽をつけて

表1 白山のニホンザルの主要食物

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	重要な食物		
動物					昆虫等									(昆虫等)バッタ類、クサギカメムシ、ヨコバイ、クワガタムシ、セミ類、水生昆虫	
草本植物					花 種子									(草の花・種子) ツリフネソウ、アカソ、ゲンノショウコ、ミゾソバ	
	根・芽											根・芽	(草の根・芽) クズ、ススキ		
					葉 (若葉)									(草の葉) ススキ、アザミ類、ヤマヨモギ、スゲ類、ウド、ハギ類	
木本植物	芽・皮											芽・皮	(木の芽・皮) ケヤキ、クワ、フジ		
					花									(木の花) ブナ、ヤマザクラ	
	果実 (落果)									果実					(木の実) キイチゴ、ミズキ、ブナ、ヤマブドウ、キハダ、ツノハシバミ、ミズナラ
					葉									(木の葉) カエデ類、ブナ、マタタビ、ササ	
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			

いて、また広葉樹林が広がっている白山中腹では、秋には味も栄養価も良い木の実が豊かに実る。

〈山の木の実の不作〉

白山のサルの好物の中で、量的にも豊富で重要な木の実には、ブナ、ヤマブドウ、ミズキ、ヤマボウシ、サルナシなどがある。それらの食物のあるところを渡り歩き、餌付けされた群れでも餌場から2 km以上離れたところへ採食に出かけることもある。ところが今年はそれらの木の実が不作だったというのが多くの人の見かたである。これらの果実類の今秋の結実状況ははたしてどうだったのか。一本の木ではなく、山全体で、ある種の木が本当に不作か豊作かを判断することは決して容易ではない。そこで、山をよく知っている人、いつも山で仕事をしている人5人に聞いてまとめてみた。意見の分かれるものについては幅をもたせて、サルにとって重要度の高いと思われるものから順に並べて表にした。

例年だと9月にサルのフンを見ると、山で食べてきたヤマブドウの種子がぎっしりつまっているのだが、今秋のフンにはまばらだった。ヤマブドウが不作だったことの現れでもある。

サルにとって最も重要なブナは年によって実を着ける年と着けない年がはっきりしていて、作柄を記録する基準もある。白山では10年以上過去にさかのぼって豊凶をたどること



夏のジライ谷野猿公園でサルを観察する人

も可能だ。今年は明らかに凶作であった。豊作だった昭和57年秋は、どのブナ林へ行っても、樹冠に鈴成りに堅果を包むから(殻斗)が見られたのに、今秋はどこを探してもブナの実を発見することはできなかった。

〈ブナの豊凶とサルの出現〉

今年の9月、10月の2か月間にカムリA群は52回ジライ谷野猿公園の餌場へ姿を見せた。過去の出現回数をふり返ってみると昭和57年には6回しか来ていない。記録が残っている昭和45年以降の秋の出現日数とブナの豊凶を並べてみると、ブナの成り年にはサルが餌場へ来る日数が少ないという明瞭な関係が読みとれる。

しかし、雑食性であるサルの食性の幅は広く、ブナ以外にも多くのものを食べているし、食べる能力を持っている。ブナの実が多い年には、ミズナラやクルミを食べるところはほとんど見られない。ミズナラのドングリはしぶ味が強く、人間が食べるとしばらく口をゆがめなければならないほどだ。ミズナラの実は落果して雨にさらされ根が出はじめるころにしぶ味がぬけるので、これはサルも好んで食べる。ところが今秋はミズナラの木に登ってドングリを食べるところや、地上に落ちているドングリを食べるのをよく見かけた。例年、自然保護センターの観察園路にドングリがたくさん落ちているのだが、今年はサルが食べたカラばかりで、一つ二つ拾っていこうという子供たちちもがっかりだった。

表2 昭和58年の木の実の作柄

ブナ	凶
ヤマブドウ	並~少
ミズキ	少
ヤマボウシ	少
サルナシ	少
ツノハシバミ	少
ミズナラ	並~少
クルミ	並~少
トチ	豊
クリ	並~少
カキ	並~少

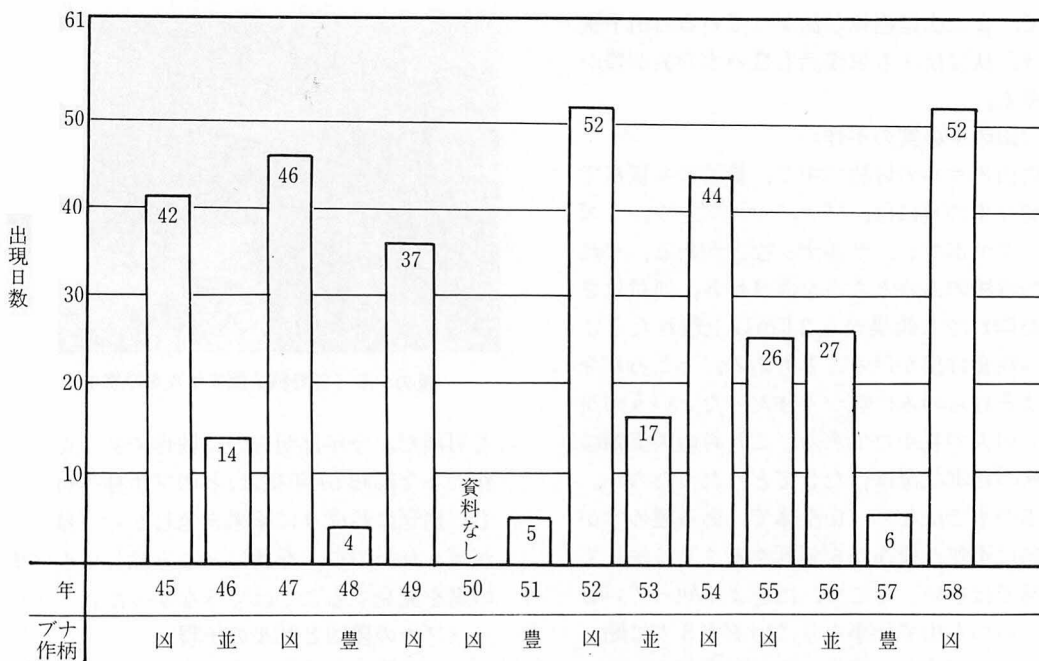


図1 9月、10月のカムリA群の餌場への出現日数

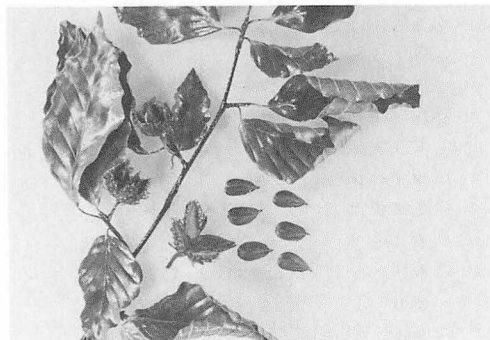
センター周辺の昔、焼畑・出作りをしたところにオニグルミの木が多い。このカラは堅く、人間も歯で割ることは困難なほどで、サルにとっても中に味のよい子葉が入っていることは知っていても、なかなか手を出さない。ブナのない年には、サルがクルミの実を歯で割ろうと努力するのが目につく。実際にオトナザルではあの堅いカラをガリッと割って中を食べているものもある。

＜その他の変わった動き＞

尾口村内の目附谷にあるクリ林へサルが出た。以前の出作り小屋周辺にあった大きなクリ林で、所有者は季節がくると小屋がけし、落ちるクリを拾って商品としていた。目附谷は、冬になると白山の群れの一つであるタイコA群がやってくるころだが、秋から来ることはこれまでなかった。ところが今秋はクリが実った頃に約70頭の大集団がやってきて、数日でほとんどのクリの実を食べてしまった。

白山ろくのいくつかの集落では、山に雪が積る頃になると、集落近くの柿を食べにサル

が出てくることがある。その頃の柿は人間の採り残したもので、村民もそれほどさわがない。しかし、今年は10月から吉野谷村瀬波へ約30頭の群れが出てきて、収穫近い大根をかじり出した。追っばらえばその時は逃げていくが、人の姿が見えなくなるとすぐに畑へもどってくる。吉野谷村では、サルが山の動物のシンボルであるが、害獣として対処せざるを得なくなり、駆除まで考えたのだが、幸い収穫の進んだこともあって、サルは畑へ出て来なくなった。



昭和57年に豊作だったブナの実

〈栄養不足になるか〉

秋にあるべき山の木の実が少ないと栄養不足にならないか、あるいは冬に備えて貯えておくべき脂肪が不足して厳冬期を乗り切れないのではないかとの声もあった。サルは食性の幅が広く、いろいろなものを食べることができるので、この秋も見たところ昨年と比較して、やせているとか空腹でガツガツしているようすは見られない。秋のブナの不作が直接飢死や死亡率増加に結びつくことはない。

山の木の実の不作は数年に一度めぐってくる自然の周期だから、今年がサルにとって危機というわけではない。ちょうどこの秋、中国のジャイアントパンダ生息地で主食のササが開花して枯れはじめ、パンダの生存が危ぶまれているという話題があった。ササが一勢枯死するのは80年に一度ともいわれ、昔は広大な山地に広い分布をしていたパンダであるが、人間の手による山の開発で、80年前とはパンダの生息環境が変ってきている。またパンダの生息数が少ないことと単一食性といえるほどササに依存していることから、問題が大きくならざるをえない。

一方、石川県のニホンザルは、手取川上流



冬を迎えた今年生まれの仔

の尾添川流域、犀川上流の高三郎山周辺に群れの分布が見られている。これまで私たちは、7～8群、300～400頭が生息、とやってきたが、近年いくつかの群れに分裂が確認されたのと、各々の群れが少しずつ大きくなってきていることから、この10年間は増加傾向にあると見ており、今後、石川県下のサルの数は、9～10群、400～500頭ということにする。

昭和48年から49年にかけての冬は餌付けしているカムリA群が、大量に死亡したと見られた冬であった。秋に84頭だったものが翌春には57頭に減っていて、その中では初めて冬を迎えたアカンボウ16頭のうちの10頭が姿を消していた。しかし、昭和48年の秋はブナの豊作年であった。ところがその冬は、大雪で長い冬であった。白峰での記録をみると、積雪20cm以上の日数が153日間もあり、例えば暖冬といわれた昭和54年の43日間と比較すると、大変長い冬であった。サルの群れの大きさの変動は、死亡・出産とオスの出入りでおこっている。群れ全体のサルの数だけで死亡率の変化を見ることはできず、全個体に名をつけ、識別してはじめて正確な記録がとれる。そこで数を把握しやすく、死亡率も高い当才仔の数の変化を追ってみる。昭和54年秋に28頭だったものが翌春には17頭までになっていた。昭和55年生まれの子は8頭から4頭に減った。この両年ともブナは凶作であり、昭和56年1～3月は例の豪雪にもみま

表3 カムリA・C群の出産数・生残数

年	オトナメスの数	当 才 仔			ブナ	白峰の積雪20cm以上日
		産児数	秋の生残数	翌春の生残数		
昭和48	A群 29	17	16	6	豊	153
49	A	6			凶	98
50	A	16			凶	91
51	A	7			豊	110
52	A	25			凶	103
53	A	6			並	43
54	A 43	38	28	17	凶	86
55	A 47	10	8	4	凶	131
56	A 35	7	6	6	並	79
	C 12	2	2	2		
57	A 42	28	23	22	豊	82
	C 13	7	7	6		
58	A 44	17	15		凶	
	C 12	5	5			

われている。一方ブナは並作で冬も平年並であった56年から57年にかけては、A・C両群合せて8頭のアカンボウは全部冬越しをしている。

秋の木の実の不足に例年以上に長く厳しい冬が重なると相乗効果で死亡率が上がるのが予想できる。サルにとっての冬の厳しさとは、蓄積した栄養を使い果たした冬の後半にまで大雪であつたり積雪が長びくことである。

サルがどの程度脂肪を蓄えているのかを見るために、秋から春にカムリA群のいくつかの個体の体重を測ったことがある。上皿ばかりに大豆をおいてサルが上に乗ったところを読もうとするのが、なかなか思うようにはいかない。また、秤に乗るのも、同じ個体が何回も乗るので少数例しか計れていないが、体重変化はかなり大きい。オトナメスでは秋に約13kgのものが冬の終りには約11kgになっている。2オの仔ザルでは約6kgのものが4kgほどになる。春の体重を基本とすると体重の30~40%も脂肪で太っていたことになる。



初雪の中でササの葉を採食

を失わないようにしている。確かに深い雪の中のサルの生活は苦しく、中には耐え切れないものがあるかもしれない。しかし、これが雪国のサルの真の姿であり、人間に頼って生きるサルを幸せだとはだれもいえない、と筆者らは説いてきた。現在もその考えはかわっていない。

私たちがサルに餌を与えているのは、サルを保護し数を増やすのではなく、野生のたくましいサルを観察することが目的である。いわばサルのためでなく私たちの都合でやっていることなのだ。したがって、餌付けが本来のサルの生活をできるだけゆがめることのないよう配慮する必要がある。餌付けによって増えすぎたといって間引いたり、人馴れしすぎて畑や果樹園を荒らすようになって駆除するといった問題は、全国のほとんどの野猿公園で実際におこっている。

この冬はどんな雪になるだろうか。昭和57年、58年と雪の少ない冬が続いたあとなので比較的老令のサルも残っている。また今年、カムリA群では15頭、C群では5頭のアカンボウが初めての冬を迎えようとしている。

(白山自然保護センター)

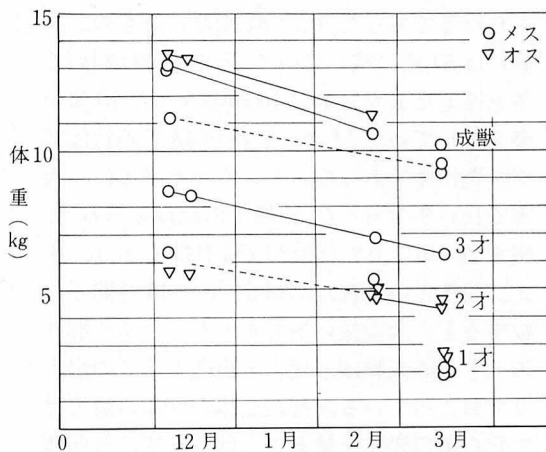


図2 カムリA群の冬の体重減少

〈餌付けの基本〉

大量に死んだ48~49年の長い冬には、サルがかわいそうだから手をさしのべてやってほしいという意見や投書が相次いだ。しかしながら、白山ではニホンザルができるだけ野生

出作り地での死亡者について

千葉徳爾

昭和 58 年 3 月に既に一度拝見し、テレビでも紹介されたことのある白峰村林西寺の天保 5 年からの過去帳を、もう一度べつの角度から注意して拝見しました。その一部については前回（はくさん第 11 巻 1 号、「いわゆる出作りへの疑問」）報告しましたが、いま一度この帳面にのっている注意すべき事実を述べてみます。

この過去帳を繰ってゆくうち、興味ある事ながら気づきました。一つはテレビで示された雪崩による死亡者の記載です。この帳面では、天保 5（1834）年の 2 月からはじまって明治 26（1893）年まで、60 年間の檀信徒の死亡者が記載されています。しかしながら、そのうち雪崩による死者として明記されているのは、明治 5 年から 26 年までの 20 年間であり、3 回 19 人のみであります。

上の事実をどのように理解すべきでしょうか。明治以前の 40 年間には死亡原因が全く記載されていないので、雪崩があり、それによる死亡者はあったのだが、過去帳にはその旨記されなかったと考えることが一つの考え方です。いま一つは、明治になって雪崩が多くなり死者が出る災害が起ったが、天保以後の幕末には死者を出すような雪崩はなかったとみる考えかたをとることです。

まず、その記載形式をみますと、明治 5 年正月のことで日はわかりません。

- 〇〇〇〇 男 父
- 〇〇〇〇 女 妻
- 〇〇〇〇 女 娘 18 歳
- 〇〇〇〇 女 娘 11 歳

右四人之者共八名谷山出作之家冬住居候処アワツキ横死日限相ヒ不分候

最後の明治 26 年は大雪だったとみえて 2 回の雪崩被害が記されています。その最後の

ものは、

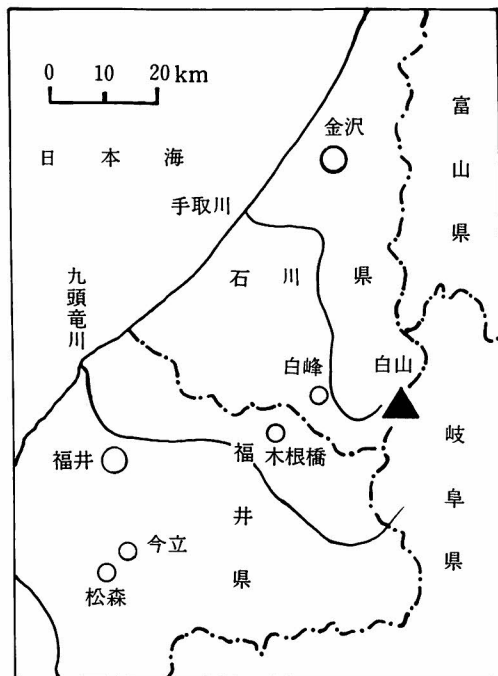
〇〇〇右衛門

妻

子三人

右四名ノ者二月十三日ナグレニ家ヲツプシ死去ス

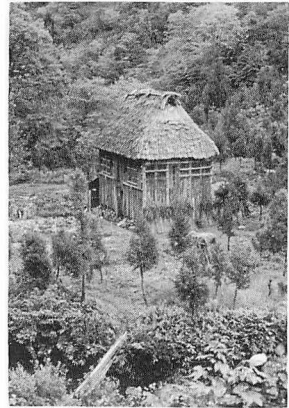
これからわかるのは、山中で雪崩、海上で暴風などの死亡者は同じ日に多数の死亡がみられることです。そこで、明治より前に雪崩死亡者があれば、同日付の一連の死亡者が記録されるということは確かですが、幕末期の過去帳には全くこの種の記載は認められません。年間に多数の死者が記される凶作の年にも、同日に複数の死亡は同一家族内ではありませぬ。そうだとすると天保年間から明治のはじめまで約 40 年間に、雪崩はあったとして



白山周辺図



ムツシ (小松市小原)



出作り小屋 (白峰村下田原)

も人命の被害はなかったといっただいでしょう。第1の考えかたである雪崩の死者は江戸時代には過去帳にはのせなかったという見解はどうでしょうか。

そのような理由は現在の習俗からは全く見出せないし、過去帳には、深雪で一家飢死したらしいという説明で、雪どけ後に死者を発見して葬ったという記事はみられるのです。したがって、やはり雪崩の死者のみを別扱いにすることはないとみてよいのではないのでしょうか。

その通りとすれば、やはり明治初年から雪崩がしばしば襲うようになったとみると、それにはどのような理由が考えられるのでしょうか。はっきりしたことはわからないのですが、一つの可能な説明としては人口の増加によって、雪崩の危険のあるような場所にすら出作小屋が設けられるようになったのではないかということです。もちろん天然の気象状態も変化したかもしれませんが、この方は確認の手段を今のところ思いつかないのです。

いま一つ、過去帳に載っている死者の中には白峰地区外で死亡した者の死んだ場所が記してあります。その大半はいわゆる山ムツシの出作地の死亡者ですが、それ以外に天保期の死者には遠い土地での死者が何人かっています。まず過去帳の最初に記されている四名は、いずれも越前にて死去と書かれ、特に

はじめの3人は夫婦と息子で、息子だけが三谷の家で死に、夫は近江、妻は越前で別々に死んだものようです。おそらく前年の天保4年の凶作で出稼に出て旅空でなくなったのでしょう。同年に他の4人の一家が主人は越前松森で、息子が同今立郡で、母と娘とは木根橋で日は異なりますがいずれも春に死んでいます。いわゆる端境期ではあり、凶荒期ではあり、やはり飢渴に迫って男は出稼に出たもののうまい口もなく、残った女たちも食が乏しいために生きてゆけなかったものように思われます。天保七年の春に江州国友村で死亡した男はその後の他国で死んだ唯一の事例ですが、これは凶作ではないので病死でしょう。

天保7年の暮から8年夏にかけては大家族が全滅しており、これも飢饉によるものようです。死亡月日の不明なものが多いのはやはり出作住居で隣家が遠いため、他人に気づかれずにつぎつぎと死んでいったのでしょう。その他の平年にも夫婦が死んだという事例は2組ありますが、これは事情がわかりません。ただ、いずれも出作小屋でのことでした。出作小屋での生活はきびしいものだったことがうかがわれます。

(明治大学文学部)

白山麓の地場産業

岩田 憲二

白山自然保護センターがある吉野谷村あたりをほぼ中心として南北に連なる一町五村（鶴来町、河内・鳥越・吉野谷・尾口・白峰各村）は、いわゆる白山麓地域と呼ばれています。広義に解釈すれば、加賀地方の山間・山麓部の大半が白山麓地域といえなくもないが、地形・交通・行政といった面での統合性を考えると、ここでは上記一町五村を白山麓地域と規定した上で同地域の地場産業を考察します。

さて、地場産業はどのように定義されるかが問題となります。一般には、特定の地方に古くから定着している固有の産業が地場産業とされています。例えば、新潟県燕市の洋食器産業、岐阜県関市の刃物産業、石川県内では九谷焼、輪島塗などが全国的に知られています。ここでは現実に白山麓で生産活動を行っている産業、あるいは過去に当地域に存在した産業を地場産業とし、しかも規模の大小を問わないことにします。こうした地場産



ナメコ産業（吉野谷村吉野）

業を白山麓一町五村別にまとめたのが表1です。これによると、各産業の原材料は農林水産物が多く、白山麓各村の産業構造や文化的背景、あるいは自然環境がかなり反映されています。こうした農林水産物の大部分はそれぞれの地元で生産、あるいは採捕・採集され、加工、商品化されています。

これらの地場産業の中には既に消滅してしまったり（和紙、コシキ、スキー板）、衰退してしまったり（ヒノキ笠）したものがある一方で、地元で昔から利用されたり生産されたりしていた産物を大量生産により商品化されたもの（ワサビ、ナメコ、養魚）があります。また、厳密に言えば地場産業の範疇に入らないかもしれませんが、県外から誘致された製造業が4企業ほどあります。地域別にみると、一町五村のうち鶴来町だけに地元原材料とそれほど縁のない製造業があるのに対し、他の五村は自村の原材料を使った産業があるのが特徴です。これは、鶴来町が手取峡谷の出口に位置する典型的な谷口集落であり、手取峡谷沿いにある他の五村を後背地（ヒンターランド）とするためと考えられます。鶴来町と五村は、かつてはかなり強い結びつきがありました。近年は結びつきが弱くなってきて

表1 白山麓の地場産業

町 村	地 場 産 業	
鶴 来 町	酒造業、打ち刃物、木材加工業（家具、製材）、スキー板製造	
河 内 村	養魚、林産物（ワサビ、クルミ）	
鳥 越 村	さわし柿、陶石、和紙	
吉 野 谷 村	ナメコ、養魚、和紙	繊維工業
尾 口 村	山菜加工、養魚、ヒノキ笠、ワサビ	銃器、電子部品
白 峰 村	牛首紬、林産物（ワサビ、キハダ、ナメコ）、コシキ	ゴム工業

註）太字の産業は既に消滅したもの。破線より右は誘致企業。

います。

表1の地場産業のうち、尾口村のヒノキ笠と白峰村の牛首細は、手取川ダム建設（昭和49年～同54年）による村落の水没を契機として、その一部が鶴来町へ移転しております。交通、通信手段が著しく向上し、白山麓地域内の交流が極めて迅速化した現在では、生産技術さえしっかりしていれば地場産業の移転は今後もおこりうると思います。

さて、今後の白山麓の地場産業がどうなるかという点についてですが、この地域に固有の技術や特産物に支えられたものについては、過疎化が進んでも残るでしょう。特に山麓五村の地場産業については、大半が観光産業と結びついているために、急激に消滅することはないものと考えられます。その点が、代替工業品により圧迫を受けた和紙、コシキ、ヒノキ笠等と異なります。白山麓でよく売れるお土産のアンケート調査結果（表2）をみると、山麓の林産物を材料としたものが圧倒的に多いことがわかります。

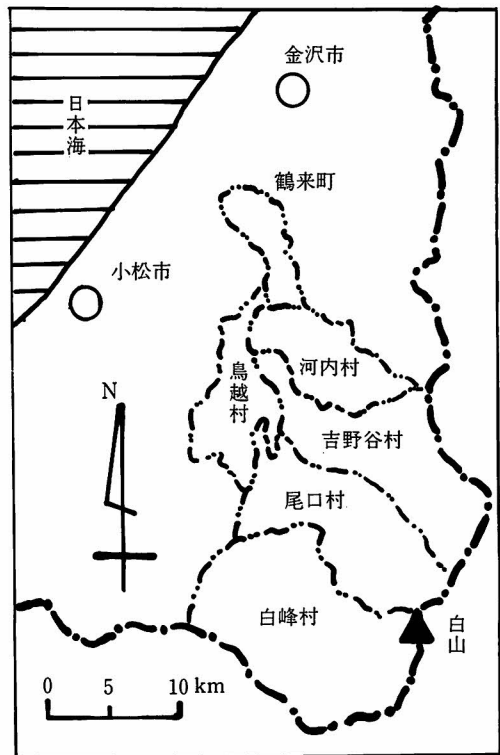
白山麓の林産物のうち、表1、2で取りあげた品目について、県全体の生産量に対する当地域一町五村（鶴来林業事務所管内でもある）の割合をまとめると表3のとおりになります。白山麓の伝統的生活文化の所産ともいえるこれらの林産物は、今では地場産業化するか、あるいはその原材料となっています。白山麓の地場産業の多くは、単なる産業とか

表3 林産物の生産量

品目	一町五村生産量	県生産量	シェア(%)
ナメコ	24.3トン	134.1トン	18.1
ワサビ	2.7トン	3.2トン	84.4
クルミ	1.3トン	1.8トン	72.2
ゼンマイ	2.6トン	6.8トン	38.2
キハダ	3.0トン	3.0トン	100.0

石川県林業経営課資料（昭和55年度）より

就業の機会を与えるといった以上に、地域内の生活文化に関係があるものと考えられます。



白山麓一町五村図

(白山自然保護センター)

表2 白山麓お土産ベスト5

順位	品名	主な産地
1	山菜づけ	山麓全体
2	白山ナメコ	白峰, 吉野谷
3	ワサビモチ	鶴来
4	クマ肉 (缶詰)	白峰村
5	クルミモチ	鶴来

以下、民芸品、トチモチ、牛首細、白山ハチミツ、堅豆腐など（白山観光開発公社資料より）

中部ドイツのブナ林から

谷 田 一 三

昭和 57 年 7 月の白山国立公園指定 20 周年記念シンポジウムの席上、四手井綱英先生は日本人とヨーロッパ人の「自然観」の違いについて触れておられる。「日本人は景観として森をながめることを好み、ヨーロッパ人は深い森の中を歩くことが好きなようです」「ヨーロッパでは天然林に近い状態の都市林を造る」「日本の林業は人工林を、ヨーロッパの林業は自然林を造る」といったことを述べられた。(はくさん第 10 巻増刊号)

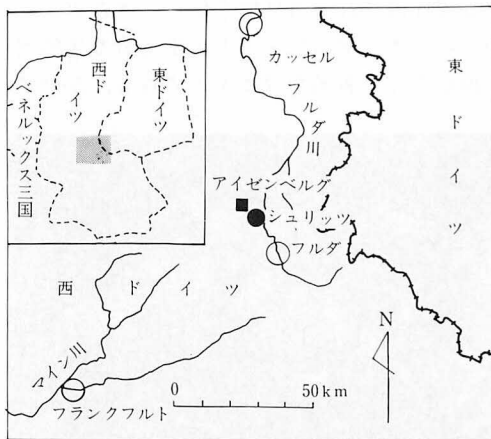
かつてヨーロッパ低地帯は、ヨーロッパシデ・ナラ・カンバ、それにヨーロッパブナ (*Fagus sylvatica*) といった落葉広葉樹林、あるいはドイツウヒなどの針葉樹との混交林に広く被われていたという。南ドイツのシュヴァルツ・バルト (黒森) の地名も、深い森林を思い起こさせる。「ヘンゼルとグレーテル」「赤頭巾」といった童話も、森と密接に暮らしていたヨーロッパ人の生活を背景にして生まれてきたものであろう。



ヨーロッパブナとドイツウヒの混交林

ヨーロッパ、とくにドイツ人の森林に対する態度は、ドイツの高速道路、アウトバーンの景観にもあらわれている。フランクフルト空港から、アウトバーンを北東へ走る。郊外に出れば、平地部でも道路に沿って自然林の緑地帯が続いている。植林された林であるが、自然状態を目標に造林され、日本の山岳道路より自然性は高い。パーキングエリアは、森に続き、林の中にはピクニック用の空間が確保されている。木製の丈夫な机と椅子だけの空間であるが、よく育った木々が、別天地を作る。

今夏のドイツ訪問の目的地は、マックス・ブランク陸水学研究所・河川研究施設である。フランクフルトから車で 1 時間半、東独国境に近い小都市、シュリッツにある。古い城と美味なビールのある、人口 5,000 人の静かな町である。東経 8 度・北緯 51 度に位置するから、樺太中部の緯度にあたる。私が訪れた 8 月の日没は 10 時近く、長い夕暮れは、戸外で食事とワインを楽しむのに最適である。この静かな田舎町を歩くと、そこここにステッカーと垂れ幕が下がっていた。私達の滞在した研究所長ツヴィック博士の自宅にも、子供



ドイツのヘッセン地方概念図



ヨーロッパブナの樹冠

部屋から垂れ幕が下がっていた。「アイゼンベルグを救え」。

アイゼンベルグは、この町の北西数キロにある 20 km²ほどの小さな森である。低地ドイツの自然は、長く人手が加わり、原始林は残されていない。黄褐色に広がるジャガイモ畑や麦畑のなかに、緑の島のように森が点在している。ヨーロッパブナは、それらの森の主要樹種である。傾斜地にある白山のブナ林をみなれた目には、平地やなだらかな丘陵地のブナ林は、新鮮である。

アイゼンベルグは、シュリッツに隣接する森の中で、もっとも立派なブナ林をもっている。しかし、林道沿いの林は、白山のブナ林ほどの荘厳さはない。植林された部分が多く、若い林であること、低木層の発達が悪いからだろう。しかし、林道から離れた小流に沿った林では、ブナもなくなり自然の倒木も目立ち、低木・草木の茂る深い林が残っていた。林内の小流で、水生昆虫の採集を試みる。渇水期で水量は少ないが、水生昆虫は多い。河床の安定していることを示すシマトビケラ、落葉を餌とする小型のカワゲラの多いことは、白山のブナ林と異ならない。水量の豊かな泉も湧いている。森から流れでる河川には、ヨコエビが高密度で生息している。石灰岩土壌の河川にヨコエビが多いのは、ヨーロッパでは一般的だったそうだが、一網で数百尾という密度はここだけだった。水量・河床の安定、ブナ林などの落葉広葉樹からの餌（落葉）

の豊富な供給が、その原因だろう。川の流れの安定度は、森林が健康であることを示している。

森の中には、鳥の姿はそれほど多くはみられなかった。昼間のせいだろうか。カケスとチュウヒの類をみただけであった。大型哺乳類は少なくないようである。アカシカを見ることはできなかったが、ノロは私達のすぐ近くまでやってきてくれた。シカは重要な狩猟獣になっている。林内には冬の猟期のための餌付け用の畑があり、林の周辺にはシカ撃ちのためのヤグラが設けてある。ブナの果実は、狩猟獣の餌として重要であるだけではなく、かつてはブタなどの家畜の飼料としても利用され、飢饉のときには人々の救荒食にもなったという。

狩猟を別にしても、アイゼンベルグの森はシュリッツの人々にとって、みじかな自然である。日曜日には、ピクニックにでかけ、秋にはキノコ狩りのできる場所である。子供達は、林の中に自分達の城を作り、枝の上にはねぐら兼見張り場を作る。日本の子供達が捨ててしまった遊びが残っている。アイゼンベルグの森の涵養する流れは、5,000 人の人々の水源となり、消毒なしに飲める上水道を供給している。

現在残っているヨーロッパの自然林の多くは、かつて王侯・貴族の私有林や個人の猟場として保護され、自然度を保ってきたところが多い。オックスフォード大学の野外生態研究地域として著名なワイトムの森も、かつて



ヨーロッパブナの果実

は貴族の私有地であった。ヨーロッパバイソンが生息し、ヨーロッパでは唯一の大規模な原生林といわれるピアロビーザ森林は、500年にわたって、ポーランド王とロシア皇帝の私有の狩猟地であった。アイゼンベルグの森も、やはりシュリッツの領主の私有林として残されてきた。現在でも、森の入口にはかつて森番であった人の家が残っていた。大戦後の混乱期に、この森は領主の手を離れ、企業家の手に渡った。今回の事件の発端は、そこにあるようである。

シュリッツの人々の知らない間に、アイゼンベルグの森を米国駐留軍の戦車基地にする計画が進行していた。シュリッツは、静かな平和な町であるが、東独国境まで直線距離で25 km。国境線の一部は、国境をみる観光地ができていたとはいえ、丘陵・森・草原のなかを延々と続く鉄条網・フェンス・無人地帯（地雷原）と、東独の監視塔は、ドイツが分割国家であり、シュリッツが国境の町であることを思い出させる。

人々が戦車基地計画を知ったとき、シュリッツでは「アイゼンベルグ」を護るための運動がはじまった。この保護運動は、日本の森林保護運動とは、やや色あいが違っているようにも思われた。

単にアイゼンベルグの自然を保護するだけでなく、シュリッツでの生活を守るための運動でもあった。隣接した森林での演習、米軍兵士の流入は、静かな小都市の生活を確実に破壊する。大規模な産業のないシュリッツにとっては、基地誘致に経済的な価値を認める声もあったという。しかし、町の人々の多くは、現在の静かな生活を選んだ。都市の喧噪を逃れてベルリンなどから移住してきた人のなかには、基地が建設されれば、シュリッツを離れるといった人もいた。

町当局も静かな町を守るため、運動に協力した。ステッカーやバッチは、町と住民の募金によって作られ、公的な建物にもステッカーが貼られた。子供達は、学校で作った手



アイゼンベルグのブナ林と溪流

作りの旗で行進し、人々は手製の垂れ幕を家庭にさげた。8月には、運動は静かに進んでいるようであった。研究所の人達によって、アイゼンベルグの動植物調査も行なわれたと聞いた。しかし、ツヴィック博士は、基地反対運動の先行きは明るくないと述べた。国境に近い私有林が基地になる可能性の高いことは、外国人の私にも感じとられた。

9月中旬、世話になった礼状に添え、アイゼンベルグのその後を博士に尋ねた。返事は朗報であった。「西独政府は基地計画を認めなかった」。シュリッツの人々の運動の成果が実ったのか、それとは無関係な政府の方針なのか、手紙には触れられていなかった。ただ「町の人々は盛大なパレードを催し、アイゼンベルグの救われたことを祝った」と書き添えてあった。

西ドイツへの新核ミサイル配備決定のニュースが流れている。国境のブナ林アイゼンベルグが、東西軍備拡大の渦中に巻き込まれないこと、シュリッツが静かな町として続くことを祈っている。

(大阪府立大・総合科学部)



ハクビシン (剝製)

石川県にもいた ハクビシン

水野昭憲

「変わった動物が持ち込まれたので図鑑を見たらハクビシンらしい。」との一報が入ったのは昭和58年6月29日であった。すぐに小松林業事務所へ急行したところ、まさにハクビシンで、だれが見てもまちがえのないような白線のくっきりした鼻すじと、毛の短いスラリと伸びた尾をしていた。

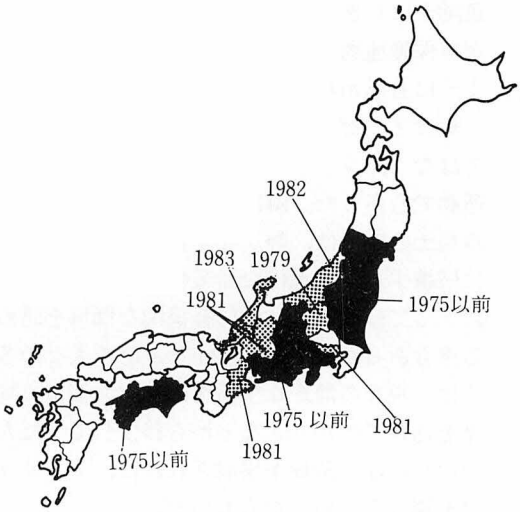
ハクビシンといっても北陸地方の人達にはなじみが少ない。食肉目ジャコウネコ科の動物で、中国南部、東南アジア、台湾、日本にかけて分布している。わが国でハクビシンが知られるようになった頃には、四国、東海、と東北南部を中心に不連続に分布していた。南方系の動物にもかかわらず九州に分布しないこと、近縁種も含めて化石のないことなどから、いつの頃か人間の手によって日本に持ち込まれて野生化したという説が一般的である。近年、三重県、岐阜県、福井県、新潟県からも記録が出ていることから、次第に分布を拡げつつあると見られている。

ジャコウネコ科の動物は、ヨーロッパ、アジア、アフリカに約75種が広く分布している。この仲間はオスの会陰腺が発達していて、香料として珍重されている「じゃこう」が採れる種類があることから、その名がついている。

これまで石川県にはハクビシンの記録は全くないけれども、福井県では昭和56年4月に大野市で初めて死体が拾われ（福井市立郷土博物館に保存）てから、これまで数例の目撃等の記録がある。以前から分布している岐阜県美濃地方から分布を拡げてきたものと考えられる。

今回のハクビシンの死体は、江沼郡山中町今立の県道上でその日の朝、クマの有害鳥獣駆除隊の西野周一さんと笹島武雄さん（ともに加賀市在住）が発見して届けたものであった。

これまでに見つかっている大野市周辺の福井県東北部から大日山系を越えて入ってきたものと考えられる。この一頭だけでは、繁殖しているものかどうかの判断はひかえたいがいずれ近い将来、他の個体や繁殖が確認されることは予想でき楽しみにしている。ハクビシンの食性や他の分布地の自然環境と比較しても、加賀地方の低山帯に分布不可能な要因



ハクビシンが確認されている県
(静岡県林業試験場、鳥居春巳氏の資料による)

は考えられない。

この死体を白山自然保護センターへ持ち帰って調べたところ、体長（頭胴長）58 cm、肩高22cm、尾長41cmのオス成獣で体重3.1kgであった。これはオス成獣としては普通の大きさのものといえる。車にはねられたもののように、頭骨が複雑骨折しており、即死だったにちがいない。

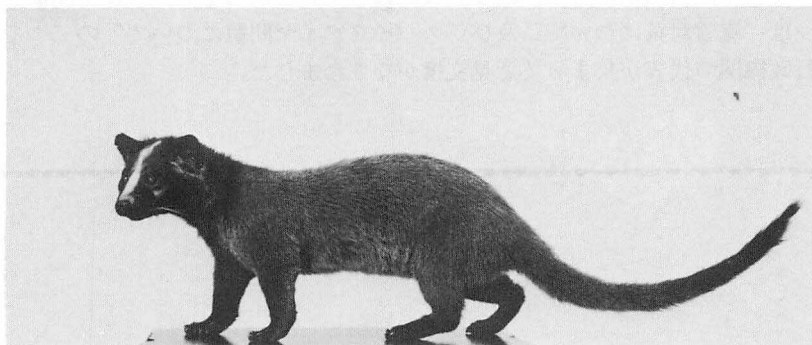
解剖の結果、胸腔内から条虫の幼生であるプレロセルコイドが1頭出てきた。条虫類は幼生では種の同定はできない。また胃には未消化の食物が入っていて、分析の結果、カタツムリの軟体8体分、小鳥（スズメ目）の綿毛と足先1体分、そして甲虫の腹部の破片1

体分が見つかった。

ハクビシンの食性は、果実、種子、植物の葉、鳥、魚、昆虫と幅の広い雑食性である。分布数の多い静岡県ではミカン畑を荒らすので一部ではやむを得ず害獣として駆除されている。夜行性であるために、人目につきにくく、生態には不明の面が多い動物である。

この死体は早朝拾われて、早いうちに処理ができたので、剥製標本として白山自然保護センターに残すことになった。今世紀に入ってから石川県の哺乳類相からシカとカワウソが消えていったが、今回ハクビシンが加わって7目17科44種となった。

（白山自然保護センター）



石川県の哺乳類・食肉目

石川県の哺乳類

翼手目	2科	10種
食虫目	2科	7種
兔目	1科	1種
げっ歯目	4科	13種
食肉目	5科	10種
霊長目	1科	1種
くう蹄目	2科	2種

石川県の食肉目

科名 種名	能登地方		加賀地方		
	平野部	山地帯	平野部	山地帯	亜高山帯
イヌ科					
ホンドタヌキ	◎	◎	◎	◎	
ホンドキツネ		◎		◎	
ノイヌ	◎		◎		
イタチ科					
ホンドイタチ	◎	◎	◎	◎	
ホンドテン		◎		◎	
ホンドオコジョ					◎
ニホンアナグマ		◎		◎	
クマ科					
ニホンツキノワグマ				◎	
ネコ科					
ノネコ	◎		◎		
ジャコウネコ科					
ハクビシン			◎		

たより

白山の紅葉の季節もおわり、本格的な雪の到来が近づいてきました。白山自然保護センターの中宮展示館は既に11月13日に閉館し、窓には雪囲いをして冬に備えています。例年、展示館のあたりでは積雪が3～5mにもなりますので、来年5月の開館まで冬期間はお休みとなります。

ブナの落葉も進んだ11月20日にブナオ山観察舎を開館しました。昭和56年の12月にオープンして以来、カモシカやサルなどが観察できる施設として多くの人に利用されてきました。これから雪の季節になりますと、今まで木の葉かげにかくれて見えにくかったカモシカが、白い雪の斜面上でははっきりと観察できます。当センターでは来年2月末にブナオ山観察舎において、「冬の自然観察会」を開催する予定です。詳細は後日新聞等でお知らせしますので、ふるって御参加下さい。

白山自然保護センター新庁舎前庭の修景緑化工事が11月30日に終わりました。新庁舎は今年7月に竣工したばかりなので、これまでは比較的殺風景な感じがないでもありませんでした。これからはブナ、トチ、ナナカマド、エゾユズリハなど白山でもおなじみの樹木が庁舎の周囲を彩ります。

昭和58年度第1回白山地域自然保護懇話会が12月7日(休)に当センターにて開催されました。テーマは「克雪対策について」及び「スパイクタイヤ問題について」の二つで、学識者や関係行政機関の代表が集まって意見交換がなされました。

(岩田)

目 次

表紙	ジライ谷野猿公園	岩田 憲二	1
山の不作とニホンザル		水野 昭憲	2
出作り地での死亡者について		千葉 徳爾	7
白山麓の地場産業		岩田 憲二	9
中部ドイツのブナ林から		谷田 一三	11
こんな発見・あんな記録3			
石川県にもいたハクビシン		水野 昭憲	14
たより			16

はくさん 第11巻 第3号 (通巻49号)

発行日 1983年12月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
☎920-23 TEL 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂